希望新聞

東日本大震災希望新聞取材班
〒100―8051（住所不要）毎日新聞生活報道部
ファクス03・3212・5177
メールkibou@mainichi.co.jp

被災地に役立つ情報や「伝言板」への投稿をお待ちしています。被災者の今困っていることも募集します。投稿は、氏名、住所、年齢、職業、電話番号（あればメールアドレスも）を明記してください。

東日本大震災

サポート情報

21日現在

こころ

女性の心のケアホットライン・いわて ☎0120・240・261、10～17時。土日祝日も対応。NPO「参画プランニング・いわて」が実施。被災した女性や支援者の相談に応じる。避難所に出向いての相談会も随時開催。支援の手が届きにくい被災者に対し、個別の要望に応じて物資を届け、話を聞く「デリバリーケア」も実施している。

こころの無料電話相談 ☎0120・2166・33、13～20時。日本産業カウンセラー協会が実施。産業カウンセラーが被災者やその家族、支援者の悩みを聞く。土日祝日も対応。

東松島市震災後のこころのケア相談窓口 ☎0225・82・1111（代表番号、「こころのケア」と交換手に伝える）、平日8時半～17時。眠れない、食欲がない、誰とも話す気にならないなどの症状に対し、市の保健師が相談に応じる。

心の電話相談 ☎0800・100・6700、平日14～20時。労働者健康福祉機構・産業保健推進センターの専門カウンセラーが被災者やその家族らの相談に乗る。

地震・津波に関するこころの相談ホットライン ☎080・3326・5612、平日9～21時。看護師やカウンセラーらでつくる仙台グリーフケア研究会の相談員が、肉親を亡くした人や地震や津波で生じた不安などの相談に応じる。電話やメール（saigaikokorocare@gmail.com）で受けたうえで、必要に応じて個人面談もする。

心の相談室 ☎090・3756・1512、24時間対応。宮城県宗教法人連絡協議会や医療関係者らが開設。対象は悩みや医療、生活、宗教に関する相談など。必要に応じて面会相談もする。

ボランティア

河川清掃ボランティア募集 国際NGO「グッドネーバーズ・ジャパン」は、サケの遡上（そじょう）で有名な大槌川（岩手県大槌町）の河川敷で、津波で流れ着いた家屋の撤去や流木拾いに参加するボランティアを募集している。「鮭のふるさと大槌川再生プロジェクト」と名付け、東京駅発の3泊4日（うち2泊は車中）のバスツアーを実施する。

日程は24日夜～27日朝▽7月1日夜～4日朝▽8日夜～11日朝▽15日夜～18日朝。定員は各回40人程度。

参加費は8000円（現地での宿泊費、食事代など）。20歳以上で、ボランティア保険への加入が必須。作業は河川敷での流木・ゴミ拾いや草刈りが中心で、川に入るのは有志5～10人のみ。水中用つなぎは借りられる。

服装や持ち物などの詳細をホームページ（http://www.gnjp.org）で確認し、サイト内の専用フォームから申し込む。問い合わせはメールで神谷さん（kamitani@gnjp.org）へ。

同町では毎年、サケの放流やつかみ取りを実施しているが、今年は開催できるか未定という。同町の災害ボランティアセンターが河川の環境修復を目指して企画した。

イベント

＜宮城・福島＞ボランティア落語公演 東北地方で落語や狂言などの古典芸能の公演企画を実施していた「影向舎（ようごうしゃ）」は、笑いで被災者の心を癒やそうと、「震災ボランティア落語公演」を行っている。

24日＝宮城・気仙沼市の関根自治会館（13時半～14時半）▽25日＝福島市のふくしま自治研修センター講堂（10～11時）。出演者はいずれも三遊亭円馬と春雨や雷太。問い合わせは影向舎☎046・297・0255。

＜東京＞東北グルメ応援市 インターネット上の仮想商店街「楽天市場」に出店する東北地方の店舗を集めた「楽天市場 東北グルメ応援市」が23～28日、東京・新宿の小田急百貨店新宿店11階催事場で開かれる。東日本大震災の被災地の復興を支援する。

東北6県の23店が参加し、水産加工物や麺類など約150品目を販売する。また、宮城県の「南三陸町観光協会」が、町の魅力を発信する特設ブースを設置する。期間中の売り上げの1％相当分を義援金として寄付。10時～20時半（26日は20時、28日は19時閉場）。

その他

■市民結婚式

被災したカップルに市民結婚式を贈ろうと企画しているNPO・全日本ブライダル協会（会長・桂由美）が、新たに会場を追加して対象者を募集している。

市民結婚式は、宗教によらない結婚式で、司式者が2人の婚姻署名を見届けるという形式。会場は盛岡市（会場未定、7月30日）▽宮城県大和町の宮城大（同月24日）▽栃木県那須町の那須ステンドグラス美術館（同月31日）。貸衣装や記念撮影、マリッジリングなどが含まれる。募集人数は各会場10組で、カップルのうち1人が被災者の場合も可。応募者多数の場合は、両方とも被災者であるカップルが優先される。問い合わせは同協会広報事務局☎03・3639・0725。

障害者ニーズ 刻々と変化

ボランティア

NPO法人「ゆめ風基金」理事 **八幡隆司さん(53)**

被災地の障害者支援を展開するNPO法人「ゆめ風基金」（大阪市東淀川区）の理事、八幡隆司さん(53)＝写真＝は3月から、東日本大震災の被災地に赴き、避難所や地域で生活する障害者の支援をしている。

同基金は95年の阪神大震災を機に設立。メンバーは同震災時のノウハウを生かし、さまざまな地域で災害が起きるたびに被災地を訪れて、障害者支援に取り組んできた。八幡さんは過去に訪ねた災害現場で、障害者が避難所や地域で取り残される事例を見てきた。このため、東北の被災地では、障害者を探し出してニーズを聞き取る作業に必死に取り組む。

実際、障害児をかかえて親類宅を転々としたり、「周囲の避難者に迷惑をかける」として、ライフラインが途絶えたままの自宅に戻って生活する障害者とその家族がたくさんいた。八幡さんはそんな家族に出会うたび、食料や発電機、おむつなどの物資を届けたり、福祉サービスや医療機関とつなぐ役割を果たした。

これまで東北の被災地で出会った障害者は約150人。障害者らのニーズは刻々と変化しており、現在では病院の送迎や見守り支援が多い。「障害者が地域で暮らしていける社会が理想。今はそのための支援だと思っています」と話す。

同基金は最低1週間以上継続して活動できるボランティアを募集している。障害者ヘルパーの経験がある人が望ましい。問い合わせは同基金（06・6324・7702）。【細川貴代】

ミニニュース

■いわきで出前学習指導 静岡県三島市の環境NPO「グラウンドワーク三島」は、東日本大震災で被災した福島県いわき市で25、26日、地元の小、中、高校生を対象に学習指導会「大学生出前寺子屋教室」を開く。家庭教師経験者の大学生らをボランティア講師として派遣し、勉強が遅れがちな子どもたちをケアする。会場は両日とも、久之浜町西部集会所（同市久之浜町西1）と、小山田多目的集会所（同市大久町小山田岸田）。参加無料。

同NPOは、被災地の子どもと家族を静岡の温泉に招待する活動を続けており、「避難所生活の長期化で子どもの勉強が遅れている」との相談を受け、取り組みを始めた。7月以降も開催予定。

事務局長の渡辺豊博・都留文科大教授は「逆境をはねのけるお手伝いをさせていただきます。『寺子屋』を希望の方は、遠慮なく連絡を」と話す。問い合わせはグラウンドワーク三島☎055・983・0136。

■4社共同でボランティアプロジェクト 損保ジャパン、沖電気工業、丸紅、みずほフィナンシャルグループの4社は、「災害ボランティアアプロジェクト」を実施している。芙蓉グループ社会貢献連絡会などを通じて交流があった4社が、企業の枠を超えて発足させた。

各社からボランティアを募り、宮城県内の被災地で5回に分けてボランティア活動をする。第1陣が19日から活動。各回30人、4泊5日で活動し、7月末までに計150人が参加する予定。

被災地では、宮城県の災害ボランティアセンターと連携し、泥のかき出し、家財道具の運び出し、生活用品の洗い流しなどの活動を行う。

ニーズ情報

サロンに置く家電を

被災者が求める物資や人的支援情報をお知らせします。必ず事前連絡をお願いします。

求む！冷蔵庫など 避難者の相談窓口と憩いの場、学生ボランティアの拠点として、サロンをつくりたいと考えています。部屋の大きさは6畳。冷蔵庫、電子レンジ、電気コンロ、食器棚、本棚、扇風機、ホワイトボードなど各一つを必要としています。支援をお願いします。問い合わせはこども緊急サポートネットワークふくしま（☎024・592・2270）の佐藤さん、河野さん。URLはhttp://www.npomagokoro.com/top.html

■ふくふくプロジェクト
（福島市）☎024・526・4533
f-ssc@bz01.plala.or.jp
http://www.f-npo.jp/

ハエ取りシート急募 陸前高田市の水産加工工場付近で、散乱したサンマが腐敗し、ハエが大発生している。

津波で流された家財や土砂の下敷きになったサンマは収集のめどがたたず、周辺の土も変色している。ハエ取りグッズはいくつあっても足りないほど。

特に、設置が簡単で人体に無害なハエ取りシートや置き型のものが重宝されている。

その他、子供用の夏物衣料や長期保存可能な缶詰、乾麺などが依然、不足気味。汗をかく季節なので衣料は新品を求めている。

■遠野まごころネット
（岩手県遠野市）☎0198・62・1001
tonomagokoro@gmail.com
http://tonomagokoro.net/

支援に触れ 心育てて

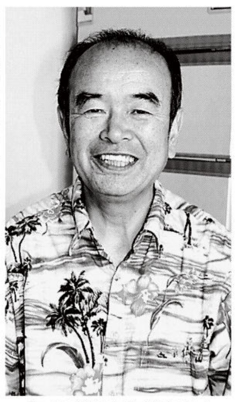
「凧の会」から「がんばろう東北」と書かれたたこを受け取った東六郷小の児童ら＝小林努撮影

声 被災者から

宮城

津波で校舎が使えなくなり、近くの中学校で授業を続ける仙台市立東六郷小の片桐正志校長(59) 「震災当日は津波で学校周辺が水につかったので、子供たちや先生、近所の人と一緒に校舎の2階で一夜を過ごしました。授業は4月19日にようやく再開できましたが、一つの教室で2学年が一緒に授業をしています。子どもたちは全国からの支援やボランティアの皆さんの活動に触れているので、これを機に思いやりの気持ちを大切にする心の教育を進めたい。こういう時だからこそ、学力を伸ばす授業を心がけたいと思っています」【石川貴教】

大阪



「アユ釣りに行きたい」と話す小竹茂夫さん

原発事故で福島県大熊町から大阪市に避難している小竹茂夫さん(57) 「4月に転居5カ所目で、大阪市営住宅に家族6人で入りました。何もせず部屋にいるのはつらく、近所の飲食店に飛び込んで働き始めました。店の人たちは、厨房では『もたもたしたらあかん』と厳しいですが、何かと気に掛けてくれるのがうれしい。福島での趣味はアユ釣りでした。例年なら6月解禁だけど、さおは家に残したまま。今は4歳の孫娘の成長と晩酌が楽しみ。釣り、行きてえなあ」【野上哲】

伝言板

幼児用の服 送ります

▼子ども服送ります 愛知県瀬戸市の加藤侑子さん(69)が小1の孫（男児）が着ていた、赤ちゃんから幼児用の服を送ります。新生児用のガーゼ肌着▽半ズボン、長ズボン▽オーバーオール▽Tシャツ（長袖、半袖）▽靴（1、2歳用）――などが段ボール2箱分あります。きれいなものばかりです。身長165センチ用のマタニティー衣類（茶色地に赤いチェックのジャンパースカート▽夏用で白地に茶色いチェックのワンピース）もあります。送料は加藤さんが負担。希望者は氏名、住所、連絡先、子どもの年齢を明記して、ファクス（0561・83・4034）を送ってください。

▼新品タッパーウェア送ります 岐阜県可児市の鶴留百合さん(59)が、タッパーウェア社のプラスチック密閉容器を送ります。いずれも新品で縦10～15センチ、横15～20センチ、高さ10センチのものを中心に、大小30個ほどあります。「汁がこぼれず保存に最適です。個人のお宅に数個でも送料負担で送ります」。希望者は、個数▽氏名▽住所▽連絡先を明記して、ファクス（0574・62・4691）を送ってください。2年前に約1年使ったベビー用の寝具一式（冬用。掛け布団、敷布団、毛布。クリーニング済み）もあります。同じくファクスで連絡ください。

▼シューマンのCD送ります 神奈川県秦野市のピアニスト、石井晶子さんは自身が演奏したシューマンのCD「ユーゲントアルバム」（「子どものためのアルバム」、2枚組み、フォンテック発売）を、被災地の保育園、幼稚園、学校、養護施設などに送ります。シューマンが愛娘マリーのために作曲したピアノ小品集で、全62曲です。「ほのぼのとした温かさに満ちた曲ばかりです」と石井さん。

限定50枚（1団体1枚）で、送料は石井さんが負担します。希望者は団体名、住所、連絡先を書いてファクス（0463・82・0645）を送ってください。

◆電◆話◆帳◆

●行方不明者・震災関連相談ダイヤル
岩手県警　0120・801・471
宮城県警　022・221・2000
福島県警　024・522・2151（内線3024）

●医療
文部科学省健康相談ホットライン・放射線関連　0120・755・199（9～18時）
放射線医学総合研究所相談窓口　043・290・4003（9～17時）

●生活支援
日弁連電話相談0120・366・556（平日10～15時）
岩手弁護士会　0120・755・745（月～土曜13～16時）
仙台弁護士会0120・216・151（平日10～19時）
福島県弁護士会024・534・1211（平日14～16時）
あしなが育英会 被災者専用 0120・77・8565（遺児らに特別奨学一時金を支給）
チャイルドライン　0120・99・7777（月～土16～21時、18歳までの子ども向け）
震災関連の悪質商法110番　0120・214・888（10～16時）

●省庁　※平日のみ
公営住宅等情報センター　0120・297・722（9～18時。全国の公営住宅などを紹介）
住宅の補修・再建（国交省）　0120・330・712（月～土）
行政相談（東北管区行政評価局）　0120・511・556
金融相談（東北財務局）　022・721・7078
中小企業相談（経産省）　0570・064・350
農林水産業の被害相談（農水省）　0120・355・567
年金の相談（日本年金機構）0120・707・118※

●金融・保険　※平日のみ
預金口座照会センター（全国銀行協会）　0120・751・557※
災害地域生保契約照会センター（生保協会）　0120・001・731※
そんがいほけん相談室（日本損保協会）　0120・107・808※
携帯・PHSからは03・3255・1306※

●移転した役所
＜岩手県＞
陸前高田市　高田町鳴石　0192・54・2111
釜石市　シープラザ釜石　0193・22・8253
大槌町　大槌小学校　0193・42・2111
＜宮城県＞
女川町　女川第二小学校　0225・54・3131
南三陸町　町総合体育館ベイサイドアリーナ南側テニスコートの仮庁舎　0226・46・2600
＜福島県＞
広野町　FDKモジュールシステムテクノロジーいわき工場　0246・43・1331
楢葉町　会津美里町本郷庁舎0242・56・2155
富岡町　郡山・ビッグパレット　0120・336・466
川内村　郡山・ビッグパレット　0120・38・2119
大熊町　会津若松市追手町第2庁舎0242・26・3844
双葉町　旧埼玉県立騎西高校0480・73・6880
浪江町　県男女共生センター（二本松市）コールセンター　03・5638・5055
飯舘村　福島市飯野支所内024・562・4200
葛尾村　旧法務局会津坂下出張所　0242・83・0271
★一時立ち入り受付センター0120・208・066
警戒区域9市町村への一時立ち入りを申し込める。8～20時

■被災地へボランティアに行くには■

各地の災害ボランティアセンター（VC）が被災地で活動するボランティアを募っている。電話で問い合わせる前に各サイトで情報の確認を。また、被災地に赴く前に居住地の社会福祉協議会でボランティア活動保険に加入することが望ましい。主なVC窓口は次の通り。

＜岩手県＞

県VCや各社協が内陸部に拠点を設け、沿岸部の被災地に送迎バスを出している。

◆県VC　☎019・637・7594　サイトでは個人参加できるボランティアバスの運行状況や各VCの募集情報を公開中
◆遠野市VC「遠野まごころネット」　☎0198・62・1001　遠野市総合福祉センター発着便で沿岸部の被災地に毎日ボランティアを派遣。登録も随時受け付け。要事前申し込み。寝袋持参で体育館宿泊可
◆宮古市VC　☎090・4478・3984　個人、団体とも1週間前までに電話連絡を
◆陸前高田市VC　☎090・2852・9736　できるだけ2人以上で参加し、3日前までに連絡
◆大槌町社協VC　☎080・3518・8490　5人以上の団体で要事前登録。個人参加は県VCの盛岡発ボランティアバスを利用する

＜宮城県＞

各VCが県外からの個人ボランティアも受け付けている。詳細は各VCのサイトで。

◆仙台市VC　☎022・231・1326　5人以上での参加は先着50人まで、要事前申し込み
◆石巻市VC　☎0225・23・6015　10人以上の団体は要事前連絡
◆気仙沼市VC　☎080・5949・7475　10人以上の団体は3日前までに事前連絡
◆名取市VC　☎022・784・3029　団体は要事前問い合わせ
◆多賀城市VC　☎080・5949・7501
◆岩沼市VC　☎080・5949・7541　8人以上の団体は要事前申し込み
◆東松島市VC　☎0225・82・9812　車中泊スペースあり。土のう袋をなるべく持参。5人以上のグループは早めに事前申し込みを
◆亘理町VC　☎080・5949・7719　団体は要事前申し込み
◆山元町VC　☎080・5949・7720　要事前申し込み
◆七ケ浜町VC　☎090・6853・4490　団体は要事前申し込み
◆南三陸町VC　☎080・2055・1066　県内外問わず団体も受け入れ中

＜福島県＞

◆県VC　☎024・522・6540
◆相馬市VC　☎0244・36・7827
◆南相馬市VC　☎0244・24・1877　公式ホームページで活動内容や注意事項の確認を
◆新地町VC　☎0244・62・5577　要電話確認。毎週木曜は活動休止日。テント泊、車中泊は禁止
◆いわき市VC　☎0246・22・5501　団体は要事前申し込み

三陸物語

Sanriku Monogatari

全盲の鍼灸師 藤原正さん ⑦

妻の腕を借り ボランティアへ

津波に続いて火災に襲われた岩手県大槌町。雪が降った15日未明まで火勢は衰えなかった。

いとこの車で避難所の体育館を出た藤原正さん(53)とその家族が、被災を免れた町内の親類宅に着いたのは、津波の翌日の12日朝だった。

避難所で一緒に暗幕にくるまった女性には事情を話し、乾パンを置いてきた。避難所には娘の先生もいた。「背広だけで寒くないの」「年寄りが寒がっていたから、ジャンパーやりました」。妻とのそんな会話が聞こえた。藤原さんは自分のジャンパーを脱いで、先生に差し出した。

身を寄せた「石井家」では、母久子さん(76)が涙を浮かべて待っていた。夫婦2人の家に藤原家の5人と久子さん、そのほかの親類縁者を含め最多で11人が世話になった。親戚同士とはいえ、一家丸ごとずっと世話になるのはさすがに気が引けた。

一番困ったのは、藤原さんの目が見えないことだった。トイレに行くにも妻子の手がいる。部屋の配置が分からないからだ。そこで、15日から床掃除を買って出た。ぞうきんでふきながら家の見取り図をイメージした。

「ほかに何かオレたちにできることはないか」。夫婦で相談したのも15日。「やれることは鍼灸とマッサージ」との結論に至り、「避難所でボランティアやっぺ」と決めた。とにかく、世話になっている石井家に朝から晩までいるのは気がとがめた。

16日朝、ズックを履いて一家5人で避難所になっている県立大槌高校に出かけた。100メートルほど歩くと、がれきの海が広がり、汚泥に運動靴を取られ、何度も滑りそうになった。道は重機で急ごしらえした補給路だけ。妻美幸さん(43)の腕を借りて歩く藤原さんのすぐ脇を、自衛隊や消防の車両がかすめて行った。【萩尾信也、写真も】

◇

「三陸物語」は火～土曜日に掲載します。

夫婦で出掛ける時は、妻美幸さんが藤原さんに腕を貸す